

大橋千佳子

嘴と眼でいっぱいの顔を向け三羽四羽とダチヨウ寄り来る

五ミリほどの殻背負うヤドカリもいて仲秋の潮だまりにぎやか

アラ70の姪に囲まれ笑顔なる叔母七十余年をさまよう

午後はフリーカー鍋やらザルやらフル稼働スローフードを作りだめする

スープ鍋の湯気を味わい徐に換気扇回す初冬のキッチン

越冬のカメムシといえど動くもの壁登りゆく我が家にも生

一冬をゴメンあなたと暮らせないカメムシの背にガムテープ貼る

干し柿は気が揉めるのも一興で 陽当たり、落下、渋は、カビはと

「おしたじ」は母の古びた言い回し女房言葉と知るや知らぬや

遠ざけて安穏だったまた人と関わる仕事断れずおり